

林市藏の実像に関する研究（二）

— 生い立ちから帝大卒業まで —

小笠原 慶 彰

一、はじめに

方面委員・民生委員制度の生みの親とされる林市藏（以下、市藏）であるが、大阪府方面委員規定（府告二五五号）が公布されたのは、府知事就任翌年の一九一八（大正七）年十月七日である。その八月には米騒動が起こっていた。その騒動時の米廉売資金の残金が大阪市と折半され、方面委員制度の当初資金とされた。もちろん、着任八ヶ月後に軍隊まで動員する騒動に直面した林が制度創設を当初からリードしていたわけではない。前知事大久保利武は、就任直後の一九一三（大正二）年に監獄学の泰斗で救済事業界でも名声の高かった小河滋次郎を府救済事業指導囑託として招聘していた。その小河は、一九一七（大正六）年五月に岡山縣で済世顧問制度が開始される以前の二月、笠井信一縣知事が趣旨を公表するとすぐ岡山に赴き研究している。このような事情からすれば、林は大久保からブレインの小河滋次郎を引き継いだことによって大阪府方面委員制度の創設者という評価を受けえたのだといえる。^{〔1〕}

しかし一般的には、市藏が大阪市東区（現中央区）なる淀屋橋河畔の理髪店「モーラ館」⁽²⁾で、鏡に映じた夕刊売り母子を見て派出所の七藤健之助巡査に調査を命じ、顕在化していない困窮家庭の存在と実状を知ったことが方面委員制度創設の動機であるとの説が流布されている。歴史的事実としては、巡査復命書は、規定公布後の十月九日付けであり、この説明は正しいとはいえない。だが、「夕刊売り母子」の悲話とともに、方面委員の発想は、市藏のものであるとの認識は、相当根強いものとなっている。たとえば、淀屋橋南詰め西側には、一九五三（昭和二八）年に府民生委員一同によつて全身像が建立されているが、その碑にも「夕刊売り母子」の悲話が記されているのはその好例であろう。生地熊本でも、熊本城に至る行幸橋のたもとに一九五八（昭和三十三）年に建てられた胸像があり、「民生委員の父」とされ、やはり同様の紹介がなされている。これについて、当時およびその後の資料を相当厳密に検討しているにもかかわらず、「淀屋橋の挿話は事実に基づく虚構として却けるのは、小さな事実⁽³⁾に拘泥して、歴史の中に脈動する生命を見通す皮相なる態度であつて、歴史の眞実を把握する途ではない。（中略）林知事の行政官としての誠実と情熱を物語り、方面委員創設の真相を伝えるに最も相応しい挿話として、永く後世に伝承して何等差し支えなきものといわねばならない」とする主張⁽³⁾さえある。

ところが、この挿話こそ市藏が「方面委員・民生委員の父」だと印象づけるものとしては、「最も相応しい」のであり、そこに「歴史の眞実」が隠されているという感を拭えない。「歴史の眞実」として、このような認識は、自然に広まったのだろうか。何か別の要素があつたのだろうか。また現実の市藏は、どのような人物だったのか、どうして現在知られているように「方面委員・民生委員の父」として歴史に残ることになったのだろうか。⁽⁴⁾

本稿では、市藏が実際にはどのような人生を送つたのか、それを正確に知るための第一歩として、市藏の生い立ちから帝国大學法科大学卒業前後までを明らかにするものである。

二、生い立ち

市藏は、一八六七（慶応三）年十一月二十八日に、林愼藏を父、喜壽を母として誕生した⁽⁵⁾。この母は、医家であった野田淳朴の妹であり、淳朴と喜壽は二人だけの兄妹であった⁽⁶⁾。また縁戚に清浦奎吾がいたとする資料もある⁽⁷⁾。後述のように父の林愼藏は、早世しているので母の喜壽は、たった一人の兄である野田淳朴を頼りにしたであろう。この野田淳朴の息子が市藏より一歳年長の野田寛であり、後年、旧制熊本中學校の校長を一九二五（大正十四）年まで二十五年間にわたって務めた。

市藏の生地は、筒口村である⁽⁸⁾。市藏誕生当事には、肥後国飽田郡筒口村ということになる。筒口村は、廃藩置縣後に熊本縣管轄となるが、白川縣の設置によってその所屬となった。その後、「地租改正條例」に合わせて一八七四（明治七）年に横手村と合併し、二年後熊本縣の復活で再度その管轄となり、一九二一（大正十）年には熊本市に編入された。現在の地名表記では、横手二丁目辺りである。付近は城下の西玄関口で、高麗門という城下門のすぐ外側にあたるため、高麗門外とも称されていた。ところが、市藏の本籍は、熊本市昇町（現熊本市中央街）である⁽⁹⁾。昇町は、江戸期に職衆の集住地であったので、十五石四人扶持の切米取りとしては、元来はこの地に住んでいた可能性もある⁽¹⁰⁾。

さて、父の林愼藏は維新後も禄があった⁽¹²⁾。ところが、その父が一八七二（明治五）年五月十一日に病死した。同月二十日には市藏が五歳にもなっていなかったにもかかわらず、家督を相続できたので、以後の暮らしは成り立つたといえる。

ところで、この禄で、どのような生活が可能であったのだろうか。姑母子三人が生活していくことはできたのだろうか。この頃母は、寝たきりの姑を抱え、「林の雑巾」と陰口を叩かれるほど粗末な服装で通し、煙草巻きの内

職で家計を支えたというエピソードも残されている。⁽¹⁴⁾つまり、暮らしに余裕が無かったことはほぼ確からしい。熊本ではないが、同じく九州の福岡で旧禄十五石四人扶持の士族が維新後どのような日常を暮らしていたかが左のように描写されている。

食事の時は、親子兄弟が銘々に小さい箱膳を控えていた。(中略)母が、御飯とおかずを盛ってくれる事は、今日と變わりがない。然しおかずは、朝は大抵、漬物ばかりであった。蕪菜かぶなの葉の漬かり加減の奴に熱い飯を包んで食ふ時など、私等はそれを『頬冠り』と呼んで嬉しがつてゐた。若し其の漬物の好きなのが無い時には、私はよく焼鹽をこさえて貰った。(中略)それが昂ち焼鹽で、生鹽とは違い、既に一個のおかずになつてゐた。晝や晩には何か一品のおかずがあるが、それは大抵、味噌汁、湯豆腐くらいの外、内の畑の野菜ばかりであった。竹の子に唐豆とうまめ(そら豆)などは、私の一番の好物であつた。魚を買ふことは極めて稀で、折々口に入るのは雜魚ざこか干鰯くらゐであつた。⁽¹⁵⁾

この著者は、一八七〇(明治三)年生まれなので、市藏と同時代、しかも同じ九州である。したがって、ここに描かれた食事風景が林家でも営まれていたはずだ。ただし、林家は寝たきりの祖母、母と市藏の三人であつたので、家の野菜畑はなかったかも知れないが、その分食い扶持に僅かな余力もあつたと推測している。いずれにしても極めてつつましい暮らしであつたことは確かであり、市藏の教育に特別な投資をする余裕はなかつたであろう。

三、小学校から五高入学まで

現在で言えば学齡期に達した市藏がまず通ったのは、春日學校と華陵小學校であつた。⁽¹⁶⁾しかし、市藏が春日學校にいつ入学し、華陵小學校をいつ卒業したのかを明確にするのは、かなり困難である。春日學校の第一期生とする資料があるが、⁽¹⁷⁾それによると入学は、一八七三（明治六）年九月である。当時の就学期間は、度重なる教育令の改正によってその都度変更になるが、八ヶ年程度とするのが妥当であろう。そうすると一八八一（明治十四）年頃に卒業したことになる。しかし、この間に西南戦争があり、それにより華陵小學校の校舎建設も中断されているし、⁽¹⁸⁾市藏と母の生活にも混乱があつたはずである。この頃の教育制度では、必ずしも年齢に応じて進級することではなく、試験に及第すれば卒業であるということも考慮しても、卒業は、一八八二〜三（明治十五〜十六）年頃だつたとするのが妥当ではないか。⁽¹⁹⁾

この頃のこととして、市藏が春日學校に通っていた時に、學校から逃げ帰つたある夏の日、母は厳しく叱つて登校させた。そして下校後にはやさしく迎え、めつたに口にできない西瓜を食べさせつつ、士族の子として強く生きよと説いたというエピソードも残されている。⁽²⁰⁾事実かどうかはともかく、こうしたエピソードを語っていることから、小学校時代、それも初期には、後述する青年時代のように活発な子どもではなかつたらしい。⁽²¹⁾

その後、野田寛とともに縣立熊本中學を受験したが、市藏は失敗した。⁽²²⁾この「熊本中學」は、旧制熊本中學校ではなく、一八七六（明治九）年に創設された縣立千葉中學校が西南戦争で頓挫し、廃校となっていたのを受けて、一八七九（明治十二）年に再興された縣立中學である。いわゆる洋式教育の普及をねらい、教育方針もカリキュラムも当時の文部省の基準に合わせていた。生徒も洋式に自由主義、個人主義で立身出世を志し、進歩的であつたといふ。⁽²³⁾

市藏は、その後しばらく私塾修身學校に通い、一年後に熊本中學に入学したが、すぐに退学し、⁽²⁵⁾ 濟々黌に移った。⁽²⁶⁾ 濟々黌（現県立濟々黌高校）は、西南の役で學校党熊本隊の小隊長として戦った佐々友房が服役し釈放されて後、陋屋で同心學舎を設立したのが発祥である。それを引き継いで一八八二（明治十五）年二月に私塾として設立された時は、現在地（熊本市黒髪）ではなく、城に近い高田原相撲町（現熊本市中央街）にあった。⁽²⁷⁾ 市藏の自宅からも通えるところである。その後、九州學院普通部になったり、熊本縣尋常中學濟々黌になったりと複雑な経緯をたどり、旧制の縣立中學濟々黌等數校に分離していく。⁽²⁸⁾ 創立当時の濟々黌の校風については、皇室中心、國家主義を建学の精神とし、「肥後文教の伝統に立ち、國家及び社會多方面の有為な人材の育成を目指し、新文化に対しては、保守的で和魂洋才で臨んだので、生徒の氣風はバンカラで、質実剛健の氣概に富み、振武会の中心として、文教と相俟って尚武の精神が横溢し、時代を担って立つという氣性が盛んであった」というものであった。⁽²⁹⁾

市藏が通った当時は、私塾たる濟々黌のころであった。市藏は二度の受験で合格した縣立熊本中學を退学し、濟々黌に通っているのであるから、熊本中學の校風には馴染めなかったのではないか。「當時一般學生の傾向として煩鎖にして履修に困難なる普通科の學習を嫌って私學の漢學を主とし普通科を副とする方向に趨る云々の記事が本期の年報の殆んど全部に出てゐるのを見ても、過渡期に於ける當時の中學教育の或る一面を物語ってゐる様である」とされる一般學生の傾向から市藏も例外ではなかったのだろう。⁽³⁰⁾

ただし、濟々黌の入学および卒業も確認できない。⁽³¹⁾ 當時の家庭狀況を考えれば、一部の科目だけを履修した専科生で、また賄い付きではなく、帰宅後食事してから寄宿舎に戻る「泊り通學生」であった可能性が高い。⁽³²⁾

濟々黌時代の市藏については、安達謙藏（後に内務大臣・通信大臣）、山田珠一（後に初代九州日日新聞社社長・熊本市長）および鳥居赫雄（後に大阪朝日新聞編集局長）と並べて紹介している資料がある。これによれば「山田を除いた三人はみな卒業生名簿にその名をとどめない中退組」と明記されている。⁽³³⁾ さらに私塾としての「同

心學舎」および「濟々黌」の「出身者ノ主ナル者」に鳥居赫雄はあるが、市藏はない。⁽³⁴⁾

つまり、これらの資料を斟酌すれば、恐らく何らかの形で濟々黌において勉強したことは確からしいが、入学、卒業は不明とせざるをえない。いずれにしても一八八二（明治十五）年頃に華陵小學校を卒業した後、後述するように第五高等中學校に仮入学する一八八七（明治二十）年までの四、五年間は、私塾たる修身學校に学んだ後、縣立熊本中學に入学して退学、その後は私塾濟々黌に通った。そして、第五高等中學校に進んだ後には、濟々黌同窓生として処遇されたといえよう。⁽³⁵⁾

四、五高入学から卒業まで

一八八七（明治二十）年、熊本に第五高等中學校（以下、五高）が創設された。⁽³⁶⁾ 市藏は、その五高に入学した。初期の校長は目まぐるしく異動するが、初代校長は第一高等中學校校長から転じた野村彦四郎、二代は、平山太郎、三代嘉納治五郎、四代中川元である。市藏は、この四代の校長のもとで勉強することになる。⁽³⁷⁾ 五高は、開設翌年までは古城町なる仮校舎（現、熊本第一高等学校の地）だったが、翌年、黒髪の新校舎が完成して移った。⁽³⁸⁾ したがって、仮校舎時代には自宅から通学できたが、新校舎になってからは寮に入った。これについても後述する。

ところで、後の日露戦争では多くの濟々黌卒業生が士官戦死者となっているが、この時点でも軍学校への進学者も少なくなかった。⁽³⁹⁾ したがって没落士族たる市藏が経済状況も考えて、官費で進学できる軍学校を選択する道もあったはずだが、母一人子一人で母親思いの市藏は、軍人は避けたかったのだろう。

なお、五高入学は、一八八七（明治二十）年十一月のことになるのだが、より正確に言えば仮入学である。⁽⁴⁰⁾ 第一回入学式は十一月十四日に挙行された。市藏は、仮入学であったため、その後予科三級に進み、本科二年を終える

まで合計六年を要している。⁽⁴¹⁾

五高時代はどのような学生生活を送ったのだろうか。先に述べたように、新校舎になってからは、自宅からの通学はできなかつたので「習學寮」に入った。⁽⁴²⁾寮では、第二期の炊事委員になっている。⁽⁴³⁾この炊事委員は大役であった。この頃、「五高の自治とは自炊のことなりと揶揄する人もいた」ということだが、「賄征伐」による一時しのぎではなく、満足できる食事を確保するのが一大事であつたのだ。⁽⁴⁵⁾習學寮の場合には「學校も創立以來既に三年目に當り、本校生徒の増加するにつれ、寮生の數も多くなり、従つて寮内の空氣も日に増し複雑化して來る、亦已むを得ざる自然の成りゆきである。特に食事の問題になれば、それが自己の生活に最も重大なる關係あるだけ、その感情は殊更鋭敏であるから、ともすれば、これ迄の平和を破つて面白からぬ賄征伐なども起つて來る」状況であつた。⁽⁴⁶⁾しかも寮の自炊制については「自炊制への移行は戦前の學寮の歴史の中で最も大きな出来事の一つであり、旧制五高や旧制姫路高などでは自炊制実施の日を寮の記念日としていたほどであり、（中略）自炊制になると、寮給食の成否は一に炊事委員の力量と努力とにかかつてくる」ということである。⁽⁴⁷⁾こういう中で炊事委員に選出された市藏は、それなりの信頼を寄せられる人間であつたということであろう。⁽⁴⁸⁾

また課外活動では、「龍南會」で「擊劍部委員」をしていた。龍南會とは、「第五高等中學校職員生徒及び本校に緣故アルモノヲ以テ組織シ相共に智徳を磨き身體を練り交誼ノ親密を計ルヲ以テ目的」とする団体であり今日で言う一種の生徒会と同窓会を混合したようなものであつたらしい。擊劍とはもちろん剣道のことであり、市藏が剣道をよくしていたことがわかる。⁽⁵⁰⁾

今日残されたこれらの資料からは、市藏は、勉強だけに終始していたのではなく、若者らしく多彩な学生生活を謳歌し、しかも仲間から信頼されるいたように思える。

こうして、市藏は、一八九三（明治二十六）年七月に第二回卒業生として第五高等中學校第一部法科を卒業した。

満二十六歳目前であつた。

五、帝国大學入学から卒業まで

市藏が五高を卒業した時点では、帝国大學は東京にしかなく、大学に進学するためには、上京するしかなかった。そのため市藏は、上京して一八九三（明治二十六）年九月帝国大學法科大学に入学した。⁽⁵¹⁾

東京では濟々鬻關係者や同郷の先輩の世話で、まず有斐學舎に入つた。この有斐學舎は、同心學舎の設立者の一人で後に熊本財界で活躍した高橋長秋の発案により元藩主家の財政支援を得て、東京で勉学する熊本出身者の便宜のために設けられた学生寮である。学資の給費もあつたので、その給付を受けていたと考えられるし、その後も郷里の育英会の奨学給付を受けていたと考えられる。⁽⁵²⁾

ところで、帝大を卒業する前後の逸話があるので紹介したい。

何んでも彼が大學を出た當時は就職が決つたのち文官試験が行はれてゐたさうだ、最初拓殖務省に就職することになつてゐた彼は、これも彼と同郷の親友で、大藏省に入ること決定してゐた赤星典太と二人で、受験準備の爲、相州の國府津出^{ママ}にかけて行つた、宿は濱邊の小綺麗な氣持ちのよいところ、こゝで一ヶ月ばかり毎日愉快に勉強してゐると、或る日、これも受験準備に来て居た友人二人が訪れたが、彼等の顔を眺むるや、ニヤニヤ笑ひながら妙な目を向けた、（中略）彼等の宿所は、（中略）附近切つてのあいまいやであつた、そこで彼らは吃驚仰天、粹な方面に飛んだ濡衣を着せられて、頭を掻き掻き小田原方面へ宿所を移轉したさうである、今を時めく財界の二長老も、青年時代はかくの如し、世情に通ぜぬうぶな面影が偲ばれて愉快ではないか。⁽⁵³⁾

しかし、市藏が行政科試験（文官高等試験）に合格するのは卒業後二年を経過した一八九八（明治三十一）年十二月であった。この逸話に出てくる赤星典太は卒業した年に合格している。その翌年は市藏が母親を亡くした年であるので、試験どころではなかったとして、卒業した年には不合格であったのは事実だ。⁽⁵⁴⁾ いずれにしても赤星（中西）典太が第五高等中學校の第一回の正規入学生で、市藏と同年卒業生であるということは本稿の守備範囲だとし、拓殖務省入省や晩年の財界のことは、本稿守備範囲を超える。いずれ改めて検討すべき事柄である。ここでは、この逸話の真偽のほどはともかくも、後年まで伝えられた青年時代の面影を偲ぶ逸話として紹介したに過ぎない。こうして日清戦争までまだ二年の歳月を残す一八九六（明治二十九）年七月、満二十九歳にならんとする市藏は、帝国大學法科大学政治學科を卒業した。

六、終わりに——市藏の青春と母への思慕

以上、本稿では、市藏の生い立ちから帝国大學法科大学政治學科卒業までの実像を検討した。⁽⁵⁵⁾ その結果、熊本藩下級武士の子として出生し、早くに父を亡くして、父の残した録と母の内職でかろうじて生活を立てながら、それでも教育を身に着けて立身しようと煩悶努力している姿が浮かび上がった。

しかし、その努力の方向は、明治新国家の基礎固めのための右往左往と軌を一にしたため、いろいろな揺り返しに翻弄された。たとえば、西南戦争で中断されたり、洋式教育への違和感からの逃避という現実になったりした。濟々黌時代のこととして伝えられる「鳥居の仲間」としての悪漢ぶりはそうした煩悶の結果であったかもしれない。ようやく二十歳目前にして明治新国家のもとにエリート養成機関としてスタートした高等教育学校に入学した時点で、官僚としての立身を自覚していたものと考えられよう。母一人を残して軍人の道を歩むことは、恐らく考えな

かっただろう。

第五高等學校入学後は、後に旧制高等学校文化として息づいた精神を生み出しつつも、基本的には勉学に勤しみ、帝国大學入学後はさらに高級官僚への意思を強めていったのであろう。

また幼少期は伯父野田淳朴、長じては濟々巒、第五高等中學校時代の恩師、加えて帝国大學時代の郷里からの多面的な支援は、母一人の市藏にとって心強いものであったに違いない。それでも母を一番の精神的支えとしていたらしい。それは、帝国大學入学のため上京してから卒業直後の一八九七（明治三十）年十月二十四日に母が逝去して途絶えるまでの母からの手紙を表装した巻物を「母のまこと」と表書きした箱に入れていたとする逸話が紹介されていることから窺える。しかもその表装は市藏が古希を迎えてなされたということであるから、母の死後も晩年まで変わらぬ強い思慕であつたといえよう。⁵⁶

徳川幕府最末期というより明治新政府の最初期に出生した没落士族、それも早くに父を亡くして、母と一人息子として明治初期の動乱を生き抜いた市藏は、近代化の波に揉まれつつも、明治初期の青年らしい青春を謳歌した。しかし、ある時点からエリート官僚養成コースに乗り、官僚としての立身出世を目指したのではないか。そして、その動機は母親への孝養を尽くすためであつたらしい。ここに人間的な市藏の姿を思い浮かべることができるのである。

注

（1）この間の事情については、小野修三『公私協働の発端——大正期社会行政史研究』（時潮社、一九九四）の特に第三章「方面委員制度誕生前後」で詳細に検討されている。

（2）すぐ近くの日生淀屋橋ビル二階に移転して現存している。当時府庁は、江之子島（現大阪市西区江之子島）にあり、少々の

距離があつたが、主人がカナダの理容学校帰りで「一見の客はなく、常連ばかりで、それも知事や市長など知名人」(『弓は折れず』中村三徳と大阪の社会事業』大阪社会事業史研究会、一九八五、一三六頁)が多かつたという。

(3) 大阪府編『大阪府民生委員制度四十年史』大阪府民生部社会課、一九五八、三十八頁。

(4) 林市藏の伝記としては、一九五四(昭和二十九)年に広島県民生委員連盟から出版された香川亀人『民生委員の父―林市藏先生傳』(以下、『先生傳』)があるが、聞き書きと思われる部分が多く含まれているだけではなく、事実に関しても裏づけに根拠がなく、それらが混在していて正確な伝記とはいえない。本稿では事実に関する誤謬を逐一取り上げるわけではないが、重要な点については、資料を示して訂正する。

(5) 『先生傳』(一頁)では、母は「亀壽」と表記されているが、熊本市なる菩提寺、日蓮宗安住山長國寺の墓誌では、「喜壽」となっているので、ここでは墓誌にしたがつた。両親の墓は一九三六(昭和十一)年九月吉日に市藏によって建てられており、同時に一九〇一(明治三十四)年七月五日に逝去した長男(孚・孩子)、一九〇七(明治四十)年十月三日に逝去した三男(春男・童子)の墓および林家先祖代々の墓も建てられている。この年に市藏は、古稀であるが、それが理由かどうか興味深く感じる。また、市藏自身の墓は妻と同じ墓であるが、一九四五(昭和二十)年四月に「林英三郎建之」となっている。しかし、妻の茂が一九四三(昭和十八)年三月十五日に逝去しており、市藏自身は、一九五二(昭和二十七)年二月二十一日逝去なので、自身で建てた可能性が高い。

(6) このことは「(淳朴の父の―筆者注) 淳碩は、阿蘇樗木野村の樗木野三之丞の女を娶って、一男一女を挙げた。直喜(後の淳朴―筆者注) 及喜寿と名づけた。喜寿は後林家に嫁した。市藏氏の母堂である」(江原会編『野田先生傳』江原会、一九六〇年、六頁)となっていて、確認できる。本書は、野田寛の伝記である。野田寛は、濟々巒出身で帝国大學文科大學哲學科専科に学び、母校の教員となった。その後、濟々巒が第一、第二に分離したため、第二濟々巒巒長となったが、同校が縣立熊本中學になるとともに同校校長となった。明治、大正期に熊本教育界の重鎮として、縣立中學濟々巒巒長の井芹経平と名

声を競った人物である。

(7) 「清浦子の甥で三重縣知事たりし林市造君」(楚水生「東洋拓殖の事業及び新舊首腦者」『實業之日本』第十七卷第三号、一九十四年、四十一頁)とあるが、氏名表記を誤るなど、該当部分の信頼性は低い。現在まで父方からも母方からも清浦との姻戚関係を裏付けることはできていないが、これが事実だとすれば、後年、市藏の警察監獄學校教授就任や清浦を岳父とする小河滋次郎との関係に相当の影響があったと考えられる。

(8) 『先生傳』(二―二頁)では、「先生の家であったところは俗に高麗門(こうらいもん)といい、(中略)家格は下士ではなかったであろう」としているが、これは正しくない。左は、市藏の家督相続前後の状況と当時の居住地を明らかにする史料の全文である。

「史料」

改正禄高等調 禄高帳四号／二百九／一〇六高切米拾五石／四人扶持□従前七等官／改正高十四石□林愼藏／舊名惠右衛門／右林愼藏嫡子／明次五年七月廿日家督林市藏／一〇實父儀明次四年四月廿日常備兵斥候二而東京出張仕同七月五日帰省仕候同五年五月十一日病死仕候／右之通相違無之候□以上／第五大區一小區筒口村貳百三十九番宅地士族／明次七年二月十日□林市藏／飽田／白川縣権令安岡良亮殿

本史料は、熊本県立図書館所蔵の「熊本県公文類纂八―四五有禄士族基本帳明治七年」(毛筆による手書き)の電子コピーを筆者が翻刻したものである。「／」は改行、「□」は空白を示しており、原史料にはない。またこの時点で市藏自身は七歳であり、自筆でないとは断言できないが、少なくとも独力で起草したものではないと判断できよう。恐らく野田淳朴のような近い後見人の指示にしたがったのだろう。史料からは、一八七四(明治七)年時点では筒口村に居住していたというこ

とがほぼ確実ということではしかないが、本稿では筒口村を生地としておく。

- (9) 厚生省編『紀元二千六百年社會事業功勞者事蹟』厚生省、一九四二年、二八六頁。(ただし、引用は『社会福祉人名資料事典』第一巻、日本図書センター、二〇〇三年、の復刻による)

- (10) 史料による。

- (11) この相違の理由は、不明である。江戸期から市藏の誕生した慶応まで、または明治の数年間、昇町に住んでいたかもしれない。父の逝去によって屋敷替があったとも考えられる。

- (12) 史料によると、維新政府初期には常備兵として東京に三ヶ月ほど出張している。その時点前後の俸給が十四石ということになる。史料にあるような「七等官」「常備兵斥候」については、以下のようである。まず一八六九(明治二年)の軍制改革によって「土隊、砲隊、銃隊からなる隊伍の再編成」(熊本市史編纂委員会編『新熊本市史通史編第五卷近代I』熊本市、二〇〇一年、一八二頁)や「座班式の改正、役高・役料の廃止、役名改正および官俸等級・勤料の制定」(同書、一八四頁)が行われた。さらに翌年には「中央政府の示す石高に応じた隊伍編成法によって新たな軍再編が行われた。常備一大隊が編成され、兵員補欠に備えて予備隊。補備隊が設けられ、別に大砲三大隊が編成され(中略)一等より九等までの官等級を廃止して士族・卒族の二等に分け」(同書、一九〇頁)られた。いずれにしても父の林愼藏が、細川藩士から熊本藩(縣)常備兵となって、世襲の俸給(永世禄)を得ていたのは確実のようである。

- (13) 史料による。本文で述べたように、この時点で市藏は、五歳になっていない。したがって実際の父子関係は幼少期のみであったので、以後は母子関係が老年まで市藏の精神的骨格であったようだ。これについては、本文で後述する。

- (14) 『先生傳』三頁―四頁。

- (15) 堺利彦『堺利彦傳』改造社、一九二六年、十四頁。また同書の六頁に「堺家は元、十五石四人扶持といふ小士の家柄であった」とある。なお堺利彦の生誕時点で旧小倉藩は、豊津藩になっており、その後、豊津縣を経て、小倉縣、さらに一八七六

(明治九)年に福岡縣となるので、ここでは福岡とした。

- (16) 『先生傳』(八頁)では、春日小学校となっているが、正確ではない。同校の前身は、一八七三(明治六)年に春日村岫雲院(俗に春日寺)を借りて開設された春日學校である。初代主席教員の吉田泰造が開明的な人で、従来の寺子屋方式ではない新しい教育方法を取ったために、一八七四(明治七)年文部大丞長三州の視察の際に近辺で唯一の正則小學校とされた(宇野東風『我觀熊本教育の變遷』大同館書店、一九三一年、二三七—一四〇頁)。その後次第に多くの子どもが集まり、寺院の借用では間に合わなくなつて、一時的に春日村と横手村の協力で校舎を新築し、教員を確保した。それが春日、横手兩村連合の華陵小學校である。同校は、一八七八(明治十一)年四月から一八九〇(明治二十三)年九月までこの形であり、以後は分離して春日尋常小學校となり、戦後は熊本市立春日小學校として現存している(春日小學校の變遷については、熊本市立春日小學校創立百周年記念事業期成会編『春日の歴史—春日校創立百周年記念』同期成会、一九七三年、一二一頁—一二六頁、によつた)。つまり市藏の年齢を考慮すると、春日學校に通い始めて、華陵小學校を卒業したのではないかと推測される。
- 『先生傳』に「家から相当はなれておる春日小學校」(八頁)とあるが、春日學校が横手村ではなく、春日村にあったことを考慮すれば、辻褄が合う。華陵小學校は、横手村に校舎を新築して移転しているからより自宅に近づいたはずである。地理的には、比較的自宅に近い場所(現在の熊本市新町)に一八七五(明治八)年開設の一新學校があるが、開設が春日學校より数年後になることに加えて、その時点で熊本市内であるので、当時横手村に居住していた市藏は春日學校に入学したのであろう。(熊本市役所編『熊本市史』熊本市役所、一九一七年、二五四頁)

(17) 前掲『我觀熊本教育の變遷』一三九頁。

(18) 前掲『春日の歴史』一二四頁。

(19) 野田寛の濟々黌入学が一八八三(明治十六)年であるので、後述するような事情から考えても、早くとも一八八二(明治十五)年ではないかと思われる。

(20) 『先生傳』四頁―七頁。

(21) 『先生傳』(八頁) には、市藏が先述の野田寛と兄弟のように育ち、ともに勉強したとある。本文で示したように野田寛は、市藏の従兄になるのだが、『先生傳』の記述にあるように親しくしていたかどうかは疑問である。たとえば、「二人はひろしさん、市ちゃんと呼びあつて、なかのよい、いとこどうしであつた」(八頁) とあるが、野田寛は、もと「政雄」であり、改名するのは、一八八四(明治十七)年であるので(前掲『野田先生傳』四一三頁)、この部分の表現は事実ではなからう。また野田寛の幼少期からの勉学の様子は相当詳しくわかつていにもかわらず、市藏のことについては何も触れられておらず(前掲『野田先生傳』十五―三十七頁)、多少不自然の感を否めないからである。市藏と野田寛の関係については、むしろ必要以上に重視しない方がよいと考える。

(22) 『先生傳』九頁。

(23) 本田不二郎『教育熊本の伝統』私家版、一九八五年、二十一―二十二頁。なお、当時の縣会では、実學党などの民権派(後の改進黨)と佐々友房らの政治団体紫溟会(後の国権党)が、対立していた。そんな中で、熊本中學校に関しては、紫溟会によって自派の教育機関である濟々黌さえあればよいとされて、縣立中學の予算が否決されてしまったため、一八八八(明治二十一)年三月に廢校となった。以後、濟々黌は當時は私学であつたにもかかわらず縣立同様の扱いを受け、徴兵猶予の特権も与えられた。この事情は、一八八七(明治二十)年十二月十四日の『熊本新聞』で「中學校費否決せらる」(『新熊本市史資料編第六卷近代I』八七八―八八二頁に翻刻)として詳細に報じられているが、いわゆる「肥後の党争」の結果といえる。この縣立熊本中學の第一回卒業生である井芹経平が濟々黌黌長を長く勤めることになったことも興味深い。

(24) 『先生傳』(九頁) では、市藏は受験に失敗した後、「そのころ春日校の校長明石氏が開いていた家塾、花陵塾^{ママ}で一年勉強して翌年、熊本中学に入学した」となっているが、この部分は疑問が大きい。「明石氏」は、明石鑑次郎だとすれば、確かにこの時期に「華陵小學校」の主席教員である(前掲『春日の歴史』一二六頁)。明石鑑次郎は、幕末前後の「九郎左衛門(後・

- 鑑次郎) 四人扶持御中小姓」(『新・肥後細川藩侍帳』 <http://www.shinsindoh.com/00-samurai.htm>—2005.9.23) なる人物であつたのではないか。しかし、いずれにしても華陵小學校は私塾ではない。この明石氏は、明石孫太郎という別人の可能性が高い。当時、明石孫太郎は、「修身學校」という私塾の教員であり、市藏は「出身者ノ主ナル者」とされているので、この塾で学んだことはほぼ間違いない(熊本縣教育會編『熊本縣教育史』上巻・熊本縣教育會、一九三一年、六七八頁。ただし引用は、復刻版、臨川書店、一九七五年)。同書によると、後に「養正塾」と改められた修身學校は「明治十四年二月三日其設置を認可され(中略)校主岡崎唯雄、教員明石孫太郎、(中略)學科は(中略)修身、史學、文學、習字に重く算術は珠算のみである」(七〇〇—七〇一頁)となっている。この明石孫太郎については、前述の「一新學校」の主席教員や後述の「有斐學舎」、さらに独逸學協會學校の漢學教員であつた可能性があるが、確認できていない。また市藏と鳥居赫雄をこの頃の「仲間」とする資料(寺西紀元太『濟々齋物語』西日本新聞社、一九七二年、六六頁から六七頁)もある。これによれば、暴れん坊タイプの秀才たる「鳥居の仲間」となっている。なお鳥居赫雄は、号を素川と言い、後年、大阪朝日新聞編集局長の時、いわゆる「白虹事件」によって退陣させられた人物である。その直前、寺内正毅内閣の実力者であつた後藤新平は、大阪朝日新聞による攻撃に手を焼いていた。窮した結果、竹馬の友で前年山口縣知事になったばかりの市藏が大阪府知事に抜擢され、鳥居の懷柔を期待されたとされるが、これはいずれ稿を改めて検討する。また先の資料の同箇所では、同様に鳥居赫雄もこの塾の「出身者ノ主ナル者」となっている。二人の接点はこの塾および後述する濟々齋であると考えられるので、いずれにしても「明石氏の花陵塾」は、記録、あるいは記憶の混乱による間違いであろうと考えられる。
- (25) この熊本中學への入学と退学は確認できていない。ここでは『先生傳』にしたがっておく。
- (26) 『先生傳』九頁。なお、野田寛は熊本中學を数週間で退学し、直後に父の野田淳朴の反対にもかかわらず、濟々齋に専科生として通学し、まもなく本科に入学していた(前掲『野田先生傳』三十八—三十九頁)。
- (27) 濟々齋百年史編集委員會編『濟々齋百年史』濟々齋百周年記念事業會、一九八二年、二十一—二十七頁。

(28) この間の改廃経過は、前掲『教育熊本の伝統』付録の年表に詳しい。

(29) 前掲『教育熊本の伝統』二十二頁。

(30) 前掲『熊本縣教育史』上巻、六五〇頁。

(31) 『先生傳』(九頁)では、「濟々黌に入ったのは同校の三年級」とある。また卒業についても『先生傳』(九頁)では、「明治十七年三月三日同級生二十一名とともにこゝを卒業しておられる」となっているが、これは間違いであろう。かなり信頼できる資料である「濟々黌卒業生名録(自明治十五年二月至同廿一年五月)」には、「右八十五年ヨリ廿一年ニ至ル迄ノ惣員ナリ」として、二十二人の氏名が記されているが、「林市藏」の名前はなく、明治十七年には、三月十六日に四名、十月十日に一名が卒業しているだけであり、開設以後この日までの卒業はこの五名のみである。同資料は、佐々友房稿『濟々黌歴史(自創立至明治二十一年)』に収録されている。なお本稿では、前掲『濟々黌百年史』八三頁に復刻されている同資料を参照した。前述のように野田寛は、縣立熊本中學はすぐに退学して濟々黌に移り、明治十八年四月二十三日に卒業しているので、これ以前に市藏が卒業しているというのもおかしい。

(32) このような濟々黌の仕組みについては、前掲『野田先生傳』四十頁に詳しい。

(33) 寺西、前掲書、六七頁。

(34) 前掲『熊本縣教育史』上巻、六七八頁。

(35) 前掲『濟々黌百年史』一〇五五—一〇八八頁に一八九二(明治二十五)年時点での「舊濟々黌同窓會名簿」が影印されている。それには市藏が「第五高等中學校在學」(二〇六二頁)として掲載されている。したがって濟々黌には同窓生として認知されていたことは確かである。

(36) この第五高等中學校とは、一八八六(明治十九)年の「中學校令」公布、「高等中學校官制」の制定によって、その翌年に熊本に設置され、一八九四(明治二十七)年に「勅令第七十五號高等學校令」によって「第五高等學校」と改称された、い

わゆる「五高」である。

- (37) 小泉八雲(ラファディオ・ハーン)は、一八九一(明治二十四)年十一月の着任、夏目金之助(漱石)は、その五年後の着任である。市藏の在学期間を後述のように確定すれば、嘉納治五郎や小泉八雲から直接薫陶を受け得たことになるが、漱石とは会う機会はなかったといえよう。

- (38) 第五高等學校開校五十年記念會編『五高五十年史』第五高等學校、一九三九年、十五—九十六頁。ちなみにこの「新」校舎は、現在も重要文化財「五高記念館」として熊本大学構内に現存する。

- (39) この時点からかなり後のことにはなるが、濟々巒出身で日露戦争に従事した将兵の手紙についてまとめた書物(大濱徹也監修、濟々巒日露戦役記念帖編集委員会編『日露戦争従軍将兵の手紙』同成社、二〇〇一年)がある。当時の濟々巒が掲げていた教育方針の雰囲気を知ることができる。記録としても一八八八(明治二十一年)年時点で陸士八人、海兵五人とされているし、佐々友房自身が記しているように「中退して陸海軍その他の専門學校に進学した者」(前掲『濟々巒歴史』)が多いようなのである。

- (40) 「第五高等中學校生徒入學の概況」(『大日本教育會雜誌』第七十號、一八八七年十二月二十六日、九〇七頁)によれば、試験は、同年十月十五日から二十四日まで十日間にわたって実施され、「倫理」「國語漢文」「第一外國語」「地理」「歴史」「數學」「博物物理及化學大意」「習字」「圖畫」「體操」の十科目である。二十七日より十一月五日まで特に「國語漢文」「英語」「地理」「數學」の再試験をしている。十一月十日より十二日まで「體操^{格カ}検査」となっているが、今の健康診断であり、疥癬、肋膜炎、腫物等の罹患者が報告されている。結果は、正規合格の「豫科三級生」が二十四名、「假入學生」が六十一名である。このうち仮入學生三名が辞退した。仮入學生とは、「二ノ學科ニ於テ多少ノ所短アルモ各學科ノ試験成績多クハ豫科第三級入學ノ程度ニ該當シ將來數ヶ月間ヲ期シ其所短學科ヲ補修セシムレハ漸次豫科第三級ニ編入スヘキ見込アルモノヲ假入學者トス」というものである。また当時、地元の新聞に正規格者二十四名の氏名が掲載されている。(習學寮史編纂部編『習學

寮史』第五高等学校習学寮、一九三八年、七頁、に五高の開校当時の『紫溟新報』（十一月十一日）から正規合格者二十四名の氏名が転載されている。しかし、その中に「林市藏」の名前はないので、仮入学とするのが妥当である。同じく先の「入学の概況」によれば、入学者の年齢は、正規入学、仮入学を併せて十五歳から二十二歳までで平均十八・五歳となっているので、当時満二十歳を目前にした市藏はどちらかといえば高年齢の部類といえる。

- (41) 『先生傳』（十一頁）では、「五高に入学したのは明治二十一年十一月で、卒業は明治二十五年七月である。五高では第二回の卒業生」となっているが、これはかなり混乱した記述である。入学は先に検討した通りであるが、仮入学から正規学生になったのが「明治二十一年」であると解釈しても、同年の入学式は十月なので辻褄が合わない。また第五高等中學校は、一八九二（明治二十五年）年七月に第一回卒業生（一部法科生四名、同文科生二名、二部工科生五名、同理科生三名、合計十四名）を出しているの、同年卒で第二回とするのは誤りである（前掲『五高五十年史』一七五頁）他の関係資料によっても市藏は第二回卒業生と確認できる（吉田千之『龍南人物展覧』九州新聞社出版部、一九三七年、九十一頁、五高人物史刊行会『五高人物史』私家版、一九五九年、八頁、および『第五高等中學校一覽自明治二十六年至明治二十七年』）
- (42) 前掲「奮濟々巒同窓會名簿」では、原籍が「飽田郡横手村」、現住が「第五高等中學校寄宿舎」となっているので、確認できる。

- (43) これは、先輩梅野實氏の談として次のように紹介されている。「寮生全員の選舉により第一回の委員藤本充安、白石秀太、安東俊明の三氏選出され、任期一年の後、林市藏氏と自分（梅野氏）とが委員となった」（前掲『習学寮史』三十一頁。）『先生傳』（十二頁）では、「生徒総代」となっているが、このことであろう。

- (44) 秦郁彦『旧制高校物語』文春新書、二〇〇三年、七十一頁。

- (45) 上村行世『戦前学生の食生活事情』三省堂選書一七二、一九九二年、三十九—四十二頁。

- (46) 前掲『習学寮史』三十頁。

(47) 上村、前掲書、四十五頁。

(48) 『先生傳』(十一頁)では、寮生活だけではなく、「会心の友人と学校付近に下宿した」となっているので、上級生時代には下宿にしたのかもしれない。

(49) 前掲『五高五十年史』四二三―四三二頁。

(50) 『先生傳』(十二頁)にも「剣道を得意としてよく部の世話をした」とある。

(51) 『先生傳』(十三―十四頁)では、明治二十五年入学、四カ年在学して二十九年卒業としているが、これは間違いである。前述のように五高の卒業年次と当時の帝国大学の就学期間である三年間を考慮すれば、事實は、一八九三(明治二十六)年入学、三カ年在学して一八九六(明治二十九)年七月政治學科卒業である。(秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、二〇〇二年、四一四頁)

(52) 有斐学舎は、現在も埼玉県志木市柏町で財団法人肥後奨学会によって運営されている。

『先生傳』(十三頁)には「小石川の有斐学舎、麴町の黒河内氏宅そのほか一二ヶ所、居所を変え」ながら、「(学費の―筆者注)不足分は五高以来お世話になった濟々黌舎監清水元五氏や、幹事の浅山氏等の世話で熊本市の時の区長(今の市長にあたる)松崎廸(ススム)氏の補助を得ていた」となっているが、これについても疑問がある。野田寛も濟々黌卒業後、上京して有斐学舎にいたが、それによると所在地は「当初は本郷の吉祥寺の附近に設けられたが、其後間もなく西方町十番地の、旧阿部家の屋敷の一部を借りて、建てられた」が、その後「小石川の茗荷谷に移転した」(前掲『野田先生傳』七十二頁および九十一頁)となっている。しかし小石川移転は、一九〇二(明治三十五)年であるから(前掲『熊本縣教育史』中巻、七九八頁)、市藏が学舎に入った頃は、西方町ではないか。ただし、野田寛は市藏の上京と入れ違いに濟々黌教員として帰熊しているの、学舎で同時に生活はしていない。また『先生傳』にある「清水元五」は、「志水源吾」「志水元吾」または「志水元五」であって、第五高等中學校開設以来五年間書記・舎監を勤めた人物であろう(前掲『五高五十年史』四九九頁)。

前掲『習學寮史』には、「舎監には十年の役隆軍に参加した勇士志水元吾」（十一頁）とある。その後は濟々黌舎監心得となっていたらしい。一八九四（明治二十七年）四月現在の「熊本縣尋常中學濟々黌職員調」に「舎監心得志水元五」という名が見えるからである（前掲『熊本縣教育史』中巻、二七六頁）。本稿ではこれらは同一人物と考えた。市藏が習學寮で炊事委員に選ばれたりしたのであるから、舎監が支援してもおかしくない。いずれにしても志水は、市藏に援助を惜しむ立場ではない。浅山は、浅山知定だとすれば、当時紫溟会系の九州日日新聞副社長であるが、その当時の濟々黌同窓会名簿には記載されているので、濟々黌幹事であったかもしれない（前掲『濟々黌百年史』一〇五八頁。前述の「奮濟々黌同窓會名簿」による）。松崎廸は、「区長（今の市長にあたる）」としているが、熊本市は一八八九（明治二十二年）に発足しており、区長とするのは誤りである。また第二代市長は松崎為己で、一八九三（明治二十六年）年から同九七（同三十）年まで在職している（前掲『新熊本市史通史編第五巻近代Ⅰ』九七七頁）。松崎廸も西南戦争で活躍した実在の人物で後に郡長を勤めている。ここでは学費の支援を受けたということから考えて、松崎廸は間違いで、やはり第二代熊本市長の松崎為己であろう。ただこれが個人的な支援であったかどうかは、なお検討を要する。というのは、一八九四（明治二十七年）年に「肥後育英会」なる団体が設立されており、「帝国大學學生」には一ヶ月十円を貸費することになっているからである。松崎為己は、この団体の発起人に名を連ねていることからして、この貸費のことであったのではないかとも考えられる（前掲『新熊本市史史料編第六巻近代Ⅰ』一九九七年、八〇一―八〇七頁）。また少なくとも最初の一年間は有斐學舎にいたとすれば、これも給費学生であった可能性が高い。野田寛は、濟々黌関係者の応援で「有斐學舎から所要の学資を給付」されていたのであるが（前掲『野田先生傳』七十九頁）市藏が志水や浅山を通して松崎為己の支援を受けたとすれば、この有斐學舎による給付を受けるためであったかも知れない。なお、この給付額は、月四円五十銭で、相当苦しかったようである。しかし、数年後のこととはいえ、もし市藏がその倍以上になる十円の貸費を受けていれば、充分であったといえよう。

(54) 前掲『日本近現代人物履歴事典』四一四頁。

(55) 『先生傳』では、市藏の出自や幼少期、学校時代をある特定の価値観からみて重みをつけるために相当の脚色しているように読める。それがかえって市藏の人間らしい青春の彷徨を打ち消してしまっているように思う。

(56) 『先生傳』一〇二―一〇三頁。